発達心理学者の子育て奮戦記（12）

広がる世界

長田瑞恵

子連れ出張

わが家の娘は満四歳、息子は一歳七か月になりました。

娘は最近、職業や仕事に興味をもち始めたようで、保育園に向かう途中に並ぶ商店を見ては、「あれは何屋さん？」と尋ねるようになりました。ある日、「お母さんは何屋さんなの？」と尋ねるので、「お母さんは先生なのよ」と答えると、「ふーん……」とわかったようなわかっていないような返事をしています。そして、「お父さんは？」と言うので、「お父さんも先生なのよ」と答えると、「お父さんもお母さんも、お仕事のところでは先生なんだー……」と考え込んでいます。

私と分野は違いますが、私の夫も研究・教育に携わっています。そのため、夫も私も、年に数回、所属学会の大会に参加するために出張します。ここ数年は日程が重ならなかったのですが、先日、運悪く

（運良く？）二人の学会開催日程と開催地が重なってしまいました。

わが家は核家族で、子どもたちを気軽に預けられる身内が身近にいません。そのため、宿泊が必要な学会に夫婦二人共が参加するためには、子どもたちを連れて学会に向かうしかありません。とはいっても、今回は遠方での学会開催だったため、まず、開催地までの移動が問題となりました。息子がまだ小さいため、たくさんの荷物を抱えて公共の交通機関で移動するのも大ごとです。仕方なく、二人の子どもと家族全員分の着替えを車に乗せ、時間をかけて移動することにしました。

移動手段の次に問題になったのが、学会開催中の子どもたちの過ごし方でした。多くの学会会場には、臨時の託児室が用意されています。しかし、学会が開催される数日間、朝から夜までずっと慣れない託児室で過ごさせるわけにもいきません。そこで、可能な限り親が交代で子どもたちの相手をして過ごし、親が二人ともセッションやシンポジウムに参加しなければならない時間帯だけ、子どもたちを託児室にお願いすることにしました。

いよいよ学会開催地に向かう日になりました。長時間の移動でしたが、娘も息子も車窓から見える景色に大喜びしながら、歌を歌ったり、おしゃべりをしたり、楽しそうに過ごしていました。

しかし、大変だったのは次の日の朝でした。夫と私は子どもたちを連れ、学会が運営する臨時託児室に向かいました。娘には事前に「お母さんがお仕事の間、保育園で先生と遊んでいてね」と話してありました。娘は心得たというような顔をして、「お母さんとお父さんがお仕事の時は、先生と待ってるね！でもH（息子の名前）君は泣くかもね。人見知りだからねー」などと笑っていました。しかし、いざ託児室の扉の前に立つと、ただならぬ気配を察した息

子だけでなく、強気なことを言っていた娘までもが私の足にしがみつき、泣きだしてしまったのです。それでもセッションに参加しないわけにはいかず、大きな声で泣いている子どもたちを託児室の先生にお願いし、後ろ髪を引かれる思いで託児室を後にしました。

セッションの間も、子どもたちが泣いているのではないかと気が気ではありませんでした。そして昼過ぎにセッションが終わると、急いで子どもたちの待つ託児室へと走りました。しかし、託児室の前へ立っても、もう泣き声は聞こえません。恐る恐る託児室の扉を開けると、子どもたちは号泣していたのがうそのように、楽しそうに遊んでいました。私は託児室の先生に心の底から感謝すると共に、子どもたちのたくましさにも改めて頭の下がる思いになりました。

その日の学会スケジュールが終了した後、家族四人そろって宿の近くの公園に散歩に出かけました。夕焼けの中、子どもたちは珍しい形の木の実を夢中になって拾い集めていました。両手いっぱい木の実を握りしめている子どもたちの姿を見つめながら、毎日毎日多くの人々に助けてもらっていること、子どもたちの存在に私自身が支えられていること、こうして家族そろって過ごせることの幸せなど、さまざまなことを考えました。そして、これからも忙し

く大変な日々が続くのでしょうが、子どもたちと過ごせる時間を大切にしていきたいと願ったのでした。

「プリキュアになりたい」

保育園では、娘の生まれ月の誕生会を開いてくださいました。その準備のために、娘の将来なりたいものを事前に聞き出しておくよう保育園の先生から言われました。そこで、保育園から帰る車の中で、私は娘に「S（娘の名前）は大きくなったら何になりたいの？」と尋ねてみました。すると、娘は「プリキュアになりたい」と答えたのです。

私はこの答えにかなり驚きました。なりたいものとして職業ではなく架空のキャラクターを答えるということ自体は、このくらいの幼児にはよくあることです。私が驚いたのは、娘が一度も見たことがないはずのテレビアニメのキャラクターを答えたことでした。そこで、「どうしてプリキュアになりたいの？」と続けて尋ねると、「だって、AちゃんやRちゃん（保育園で仲良しの友達）がそういうふうに言うんだもん。だからSもプリキュアになりたいの」と教えてくれました。

娘の答えに「なるほど」と納得すると共に、娘の世界がどんどん広がってきていることに感心しました。

わが家の子どもたちは、ほとんどテレビを見ません。テレビを見ない一番大きな理由は、テレビを見る時間がないということです。朝は出かけるための支度だけで精いっぱいで、とてもゆっくりテレビを見ている時間などありません。保育園から帰ってきてからも、できれば子どもたちと私たち親が話したり遊んだりする時間をたっぷりとりたいと思うために、やはりテレビはあまりつけません。そのため、娘と息子は、いま流行っている歌もアニメも、直接見聞きしたことはほとんどないのです。

しかし、不思議なことに、娘は流行歌を歌えますし、アニメのキャラクターもよく知っています。情報源は、すべて、保育園の友達です。

保育園の三歳児クラスに進級してから、娘はますます友達の影響を強く受けるようになってきました。「今日はIちゃんと一緒にトイレに行ったの」「R君が、チューリップがあるよって教えてくれたんだよ」というように、日中の様子を話す中にも保育園の友達の名前がたくさん出てくるようになりました。「プリキュアになりたい」という答えも、娘が家族だけの世界を超えて、友達と共有している世界を大切に感じていることの表れのように思います。

娘はいつの間にか、私たち親子だけの小さな世界から一歩を踏み出し、友達のたくさんいる少し大きな世界へと進んでいっているようです。私はその姿を頼もしく感じながら、いままでより少しだけ離れたところから娘を見守っていきたいと思います。

「四歳になったら」

娘は、四歳の誕生日を迎えるずいぶん前から、「四歳になる」ということをとても楽しみにしていました。

いよいよ四歳になる前の日のことです。とうの昔にトイレトレーニングは終了し、排尿も排便も自分一人でできるようになっていた娘ですが、この日は遊びに熱中し過ぎたのか、トイレに向かった時にはすでに遅く、トイレの入り口で尿をもらしてしまいました。

「あらら、珍しいねえ。ちょっと間に合わなかったねえ」

私にも責める気持ちはまったくなく、娘を着替えさせようとタオルと着替えを持って娘のもとに行きました。すると娘は大まじめな顔をして言いました。

「でもね、明日、四歳になったら、もう失敗しない」

あまりにも真剣な言い方だったので、私は思わず笑いながら、「そうね、四歳になったら、もう失敗しないでできるのね」と相づちを打ちました。

私たちが年齢について語る時、多くの場合、物理的な暦年齢だけを意味しているわけではありません。そこには「〇歳らしい振る舞い」「〇歳ならこうあるべき」というような一種の価値判断が含まれていることがあります。娘にとってもそれは同じことのようで、「四歳になる」ということは「少しだけお姉さんになる」「それまでできなかったことができるようになる」ということであり、「もっと大きい（そして有能な）お姉さんになる」ための一ステップを意味するようです。

四歳になってからの娘は、何かうまくできた時などは、自分で「さすが四歳のお姉さんだねー」と笑っています。反面、うまくできなかったり自分の思いどおりにならないことがあったりすると、「いやー！」と大きな声を出しながらすねることも増えました。「四歳の自分」という理想を見上げることが前向きに進む原動力となる一方で、時にはなかなか思いどおりにならない「現実の自分」とのギャップにいら立つこともあるようです。そのいら立ちはまた、娘が現在だけを生きる存在から未来に向かう時間的広がりの中で生きる存在へと成長したからこそだと思います。

すねてしまった時の娘の様子に、見ているこちらの胸が痛くなってしまう時もありますが、現実の娘の姿に寄り添いながら、空間的にも時間的にも広がった娘の世界を、娘と共に見つめていきたいと思います。

（十文字学園女子大学准教授）

＊この連載は、今回で終了いたします。